

## 歴史を逆転させないために

表題は別冊法学セミナー2015年6月号所収の元東京新聞・中日新聞論説委員、飯室勝彦さんの論文タイトルである。「ジャーナリズムの使命と覚悟」という副題のもと、長年のジャーナリスト経験を生かした鋭い指摘が続く。とりわけ印象深い指摘を紹介しておきたい。

偏狭な国家主義や愛国心、偏った民族主義などを唱える人たちは市民的自由、特に表現・報道の自由を妨げようとする。自らの意に沿わない表現・言論を封じることは政治目標を達成する手短な手法であり、それにはマスメディア支配が最も手っ取り早い。安倍首相は立憲主義を否定し、“戦後レジーム”からの脱却、軍事国家の再現、平和憲法の破壊を目指し暴走している。思惑実現のためには、安倍政権に懐疑的な多くの新聞の中でも影響力の特に強い朝日の力をそぎ、巨大メディアNHKを支配して世論操作することが重要なのである。多くのメディアは個々の事象に目が奪われ、まとまった流れを抽象的概念でしか捉えていない。個別ニュースを全体像の中において意義づけ、問題提起する報道ができない。権力を監視して主権者たる国民に思考材料を提供し適切な課題や選択肢を提示する機能を果たしていない。

ファシズムは突然やってくるのではない。あの日中、太平洋戦争もいきなり始まったのでもなく、予告なしに悲劇的結末を迎えたのでもない。ジャーナリズムが、将来を見極めたうえで“いま”を考える努力を放棄していたのである。国民が目の前に突きつけられた「現実」の圧力に惑わされないように、世界と日本の大きな流れを分析し見極めて課題、選択肢を示したり警告を発したりするのは、ジャーナリズム、1人ひとりのジャーナリストの基本的使命だ。

安倍内閣の軍事国家化にブレーキをかけるために鳥の目で捉えた大きな構図をどう伝えるか。それに対する第1の答えは「客観報道に徹する」ことである。単純だがジャーナリストが心しなければならぬ大原則だ。客観報道とは主観を排除することではない。どっちつかずの中立も意味しない。ニュースは伝え手の正しい視点、問題意識があってこそ命を吹き込まれる。強者より弱者、支配者より被支配者の視線で事象と向かい合いながらもその弱者さえ疑う自由な精神を維持し、あふれる情報の中から自分の問題意識に基づいて情報を選び、掘り下げて伝えるのが優れたジャーナリストだ。

後世の人々に「歴史はつながっていた」と言われなくするには、「平和の時代」に生きた者の責任である。憲法と歴史の鏡を磨き基本指針とすることで、あるべきジャーナリズムの形もジャーナリストの進むべき道も定まる。



(2015年5月9日)